関根浜及びその周辺地域漁業振興調査
ホタテガイ漁場開発実証試験

（要　　約）

平野　　忠・青山　禎夫・田中　俊輔・仲村　俊毅
尾坂　　康・横谷　要一[＊1]・長津　秀二[＊2]

この試験は標記調査の中の水産生物の資源生態調査のうち、貝類の実証試験として行ったもので、大畑町・関根浜・石持・野牛・岩屋・尻屋の各地先にホタテガイ稚貝を放流し、追跡調査を行って今後の外海漁場開発の資料とするものである。今年度は放流と第1回追跡調査を行った。今後昭和60年3月まで、年2回ずつの追跡調査を実施する予定である。なお、結果の詳細については別途報告書[＊3]によっていただきたい。

1. 稚　貝　放　流

放流漁場の選定にあたっては、本海域における現在までの調査・試験の結果と、本調査での漁場環境調査の結果を参考にし、地先ごとの漁場実態を考慮して行った。なお、尻屋地区は漁場環境調査の範囲外のため、放流の適否を判断するのと事前の基礎資料を得る目的で、放流予定地とその周辺の底生生物・底質を調査した。稚貝はむつ市漁協産のものを使い、昭和57年12月16～17日に210万個ずつ放流した。

2. 第1回追跡調査

調査は、ホタテガイ桁網と潜水によるホタテガイとその他底生生物の採集、採泥、写真、テレビ撮影を、昭和58年2月28日～3月12日に行った。結果はおよそ次のとおりであった。

- ホタテガイの分布は、いずれの地区でもほぼ区画内に限られており、大きな移動はみられなかった。
- 区画内での貝の生息密度は0～15個／㎡とばらつきが大かった。
- 採補された貝から求めた生残率は、96.3%（大畑）～77.8%（尻屋）と概ね高かった。
- 貝の殻長は関根浜の4.76㎝から石持の5.76㎝と、地区ごとに差がみられた。
- 底質は極粗粒砂～中粒砂で占められ、ホタテガイの生息にとってはほぼ適地であったが、大畑、関根浜では所々に岩盤がみられた。
- 底生生物は、種類数・個体数ともに少ない大畑・関根浜・岩屋と、これらが多い石持・野牛・尻屋の二つに分けられた。

＊1　大畑地方水産業改良普及所　＊2　むつ地方水産業改良普及所

＊3　昭和57年度関根浜及びその周辺地域漁業振興調査報告書．昭和58年3月．青森県